



### 掘立柱建物の柱根

掘立柱建物の一部の柱においては、根元（土に埋まっている部分）が腐らずに残っていました。このことから、調査区内に建物が存在することは確かと見られます。



### 中国から輸入された青磁（上）と白磁（下）

江戸時代に伊万里焼が生産されるまで、国内では磁器の材料が発見されておらず、青磁や白磁を生産することができませんでした。そこで、青磁や白磁を中国から輸入していました。上段中央の青磁には蓮の花が描かれています。左下の白磁は15世紀前半、ほかは13世紀後半～14世紀のものでした。



### 愛知県～岐阜県で生産された瀬戸焼・美濃焼

愛知県瀬戸市～岐阜県多治見市は、陶器の一大産地です。「せともの」の語源は、ここにあります。この一帯では、古代から陶器が大量生産され、広域に流通しました。上段は壺と椀、下段はお茶をたてるのに用いられた天目茶碗です。お茶をたしなむ階層の人々が暮らしていたことがうかがえます。



### 石川県で生産された珠洲焼

能登半島の先端、石川県珠洲市で生産された水甕（左）とすり鉢（右）です。須恵器の生産手法を受け継いで作られた陶器で、日本海沿いに広く流通します。出土した珠洲焼の多くは、13世紀後半～14世紀のものでした。



### 笹神丘陵で生産された陶器

常滑焼にならって生産され、阿賀野川流域に流通した陶器です。材料となった粘土には石を多く含みます。窯の印である「押印」のかたちから、13世紀後半に操業した「権兵衛沢窯」で生産されたものと判断できます。



**土師器の灯明皿**

明かりを灯すときに使われた皿で、阿賀北地域に特徴的な手法で製作されています。燃料にはエゴマから精製した油を用いることが多いようですが、右の皿ではアスファルトが使われています。『日本書紀』には、668年、越の国から「燃ゆる水」「燃ゆる土」が近江大津宮に献上されたとあります。「燃ゆる土」とは天然アスファルトであり、当時からアスファルトの特徴が知られていたことが分かります。アスファルトを燃料とした灯明皿は、新発田市周辺でしか出土しておらず、ご当地ならではの出土品といえます。



**箸状木製品**

いずれも井戸から出土したものです。「晴の場」で用いられる「両口箸」が圧倒的に多く出土しました。井戸を埋め戻す際、まつりを行ったことが窺われます。



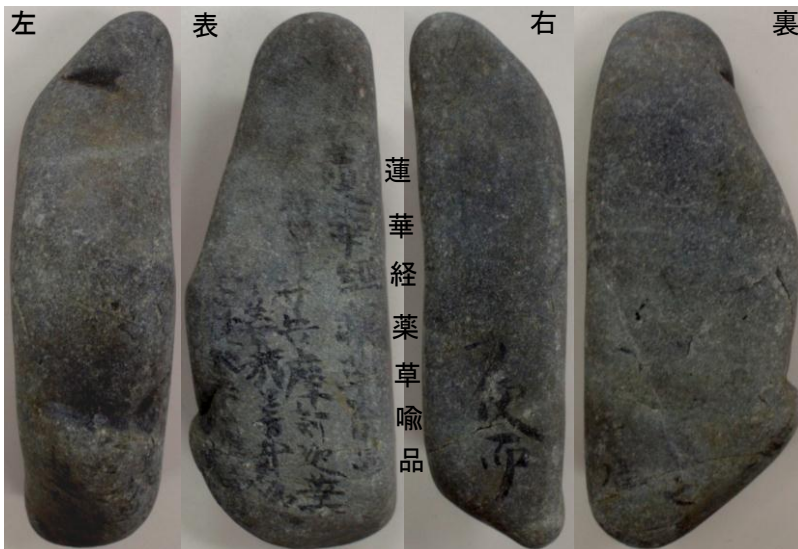
**中国から輸入された銭貨**

銭貨は主に北宋（960～1127年）で作られたものを輸入して使用していました。当時の物価は、かわらけ（土師器皿）が1文、鎌が25文、茶碗皿が47文、大工手間日当が100文、井筒が400文です。写真の5文だと小鯛1匹を買うことができました。



**飾り金具**

菊の花をモチーフとした飾り金具です。具体的な用途は明らかではありませんが、精巧な作り的高级品です。材質は、今後、分析を行って明らかにします。



蓮華経薬草喩品

**経石**

石に墨で妙法蓮華経薬草喩品<sup>ゆほん</sup>第五の一部が書かれています。詳しい内容は今後分析しますが、民衆にまで仏教が広まっていたことを裏付ける資料です。なお、これは多量の箸と共に井戸から出土しました。

## まとめ

調査区の地層を観察すると、シルト・砂・腐植物が交互に堆積していることが分かりました。これらは洪水によって運ばれた土砂と、沼沢地の岸边に生えていた植物が腐ったものです。したがって、調査区周辺は水辺で、たびたび洪水災害に見舞われた地域であったことがうかがえます。それでは何故、このようなリスクを抱えながらも、この地が利用されたのでしょうか。その答えは、「小船渡」という地名から推測することができます。遺跡が構築された平安時代以降、越後平野における物資の輸送は、舟を利用していました。「小船渡」という地名からは、舟渡し場の存在が窺えます。新発田市街地がある扇状地と海岸砂丘の間には加治川の氾濫原が広がり、ここを利用して物資の輸送が行われたと考えられます。小船渡遺跡は、このような舟が行き来する拠点のひとつであったのでしょう。